

『米国 NPO インターンシップ』評価研究

～アメリカ社会でボランティア活動を行った
学生の意識・行動変容と進路選択の調査～

An Evaluation of “NPO Internship Program in the U.S.”

-A Survey Analysis of Transformations of College Students' Awareness, Attitude, and
Career Decisions through volunteering in American Society-

森下 佳南

MORISHITA Kana

Abstract

One of the unique programs at Aichi Shukutoku University is the “NPO Internship Program in the U.S.” The program is celebrating its 20th anniversary during the school academic of 2015. The concept of the program was initially envisioned by Professor Enokida Katsutoshi and Dr. Kenn Allen in 1986, and it was brought to life in 1996. Since then, around 300 college students have participated in the program, supported in the United States by 100 non-profit organizations and host families. It continues to offer an unique learning experience for the students and those with whom they engage in the U.S.

This research is to investigate the outcomes of the program. It has been expected since the outset that the program brings impacts on the students' lives. However has never been examined in a meaningful way. The 20th anniversary offers a great opportunity to explore the program's impact in the lives of the students both immediately after their return and over the course of their lives.

はじめに

「米国 NPO インターンシッププログラム」とは、愛知淑徳大学国際交流センターが開設するアクティブラーニング科目（2 単位）の一つである。本学教授、榎田勝利氏（交流文化学部交流文化学科, 2015）と、アメリカ合衆国首都ワシントン D.C. を拠点とする Civil Society Consulting Group, LLC. (以下、CSCG) の会長、Kenn Allen¹ 氏の二人が、アメリカ発祥のサービス・ラーニング²を日本の大学にも導入できないかと、構想し立ち上げたこのプログラムは、1996 年から開始され、2015 年度に、20 年の節目を迎える。約 1 ヶ月間³、16 名前後の学生がワシントン D.C. やその周辺地域で、ホームステイをしながら、教育施設や非営利団体（NPO）で就業体験（ボランティア・インターンシップ）を行う。これまでに本プログラムに参加した学生（以下：

修了生) は約 300 名にのぼる。全国の大学には、多くの海外プログラムがある中、本学のように、米国首都ワシントン D.C. を拠点とした NPO 団体でのインターンシップを 20 年間、継続している事例は決して多くはない。20 年の節目として、プログラムの成果を検証することで、今後のプログラム運営とさらなる発展に繋げ、高等教育機関の国際サービス・ラーニングプログラムの推進に貢献できれば幸いである。

プログラム成果を検証するため、修了生の意識・行動の変容と、卒業後のキャリア形成の過程で、本体験が就業選択に与えた影響とその要因を調査することを試みた。

近年、グローバル化が進み、モノや情報に溢れ、豊かになった時代の裏で、世界や日本国内でも様々な格差が拡大し、自己の存在価値や存在意義を見失う世の中になってきた。「将来の夢や希望がない、やりたいことがみつからない、やりたい事があってもどうしたらいいかわからない、自信がない、行動できない」などと発言する学生たちがいる。現代を生きる若者たちが、アメリカでの異文化体験と就業体験を通して、如何に成長し、どのように自分のキャリア形成に生かすのか、その特徴と影響要因を分析することは、将来的に、より遅しく 21 世紀を生きる若者を育成することに繋がると考える。

1. プログラム概要

愛知淑徳大学における、「米国 NPO インターンシッププログラム」の「インターンシップ」とは、大学の授業内における理論の追求だけではなく、実践の場として理論を応用していく機会を提供する学習プロセスのことを意味する。(榎田 2015) 本プログラムは先にも述べたように、アメリカのサービス・ラーニングを意識して構想されたことから、地域社会・市民のために活動する、老人ホーム、学校、デイケアセンター、障がい者のための福祉施設、ホームレスのための施設などで就業体験することを前提としている。2015 年までの 20 年間に、約 100 団⁴体が本学学生を受け入れてきた。プログラムの目的は以下の 3 つである。

1. 公共機関、NPO、ボランティア団体を主とした、アメリカの市民社会について学習する。
2. グループでの振り返りと共有を行いながら、就業体験やホームステイを通して、アメリカ社会を体験する。
3. アメリカ社会での就業体験とホームステイを通して、英語能力を高める機会を得る。

アメリカ人学生のインターンシップの目的に加えて、日本人学生は、英語によるコミュニケーション能力、異文化適応能力、日本理解などの要素が付加されている。

学生は米国出発の約 9 ヶ月前に、説明会に参加、応募書類を提出し、日本語と英語の面接を受ける。応募条件としては、①明確な参加目的、②英語コミュニケーション能力と意欲③ボランティア活動・国際交流活動への関心、④健康な身体と心の 4 点を要求した。様々な学部から応募した学生を選抜し、合格した者が、プログラムに参加することになる。学年は 1 年生から 4

年生、大学院生まで幅広く受け入れているが、就職活動時期や年度ごとに定められる応募可能な学年制限などから、全体的に2年生の参加率が高い。1995年から男女共学となったが、女性の参加率が圧倒的に高い。(合計参加者: 女性 291 名、男性 5 名, 2015 年 12 月現在) プログラム費用⁵については、1 人当たり 40～50 万円である。

事前研修は出発の約 6 ヶ月前から開始する。科目担当者 (1996 年度から 2013 年度は榎田勝利教授と瀧リンダ氏のお二人が、2014 年度からは筆者) が国内での事前・事後研修を担当する。大学の長期休暇中は、CSCG から課されるアメリカでのボランティアに関する読書課題、第 1 回目の事前研修日 (8 月上旬) から始める英文日記を主に取り組む。大学の後期授業が再開し、出発の約 4 ヶ月前には、現地コーディネータがワシントン D.C. からオリエンテーションと面接を行うために来日する。大学キャンパス内の寮にて、学生たちは 1 泊 2 日の合宿を行い、英語で日本国内における社会問題とその解決策についてプレゼンテーションを行う。現地コーディネータはこのプレゼンテーションの内容と、学生との面談を参考に、マッチングを行う。日本での事前研修は担当教員の指導のもと、毎週 1 回 3 時間程度行う。自分自身のこと、日本文化紹介、日本国内で行っているボランティア活動について、それぞれが英語でプレゼンテーションを行う。また、日本国内の NPO やボランティア事情についても、日本語で講義を受け、知識を身につける。日々、英文日記が課題となっているため、教員 (コーディネータ) は学生たちの特徴や興味を把握することができ、マッチングの参考になる。学生自身にとっても、日常的に自分自身を振り返る機会となっている。日本国内のボランティア団体や施設を訪ね、体験学習を行うこともある。

職場とホストファミリーの決定時期が、例年、出発の 1 ヶ月前である。そこから、学生たちは、現地で成し遂げたい目標と、目標達成のための行動計画を具体的に立て、コーディネータに提出する。

ワシントン D.C. に到着後、1 泊 2 日、現地コーディネータ主導で最後の事前研修が行われる。研修が終わり次第、学生たちはそれぞれのホストファミリーに引き渡される。インターンシップは現地入りして約 3 日後に開始である。活動中は学生たちの職場がそれぞれ異なるため、週末を利用して会う約束をしない限り、学生同士が顔を会わす機会はめったにない。ただし、インターンシップ開始から 2 週間後の中間報告会で仲間と集う時があり、ここでの再会は、成長している友から刺激を受けるよい機会になる。目標を再確認し、振り返りを行う。後半の 2 週間を終え、最終報告会で、1 ヶ月間の学びを発表する。

帰国後、1 ヶ月以内に帰国報告会を行い、英語と日本語で報告書を提出する。振りかえり学習と仲間に体験と学びを共有する。最後に、ポートフォリオ課題⁶を提出して、プログラム修了となる。

「(各学生の) 目的意識、事前準備の度合い、そしてコミュニケーション能力により、各学生が獲得した成果には差が見られた。」(榎田 1997) にあるように、本プログラムの最大の特徴として、米国出発前の事前研修に重点が置かれていることを強調しておきたい。

2. アンケート調査の概要

本調査・研究を行うため、1996年度から2014年度（2015年度参加者は、これから現地にてインターンシップを行うため、研究対象外）にかけて、本プログラムに参加した修了生を対象に、以下のような方法でアンケート調査を依頼した。プログラム応募書類に記載された住所をもとに郵送調査を、海外在住が予め分かっている方たちにはWeb調査を依頼した。

①調査目的：(1)修了生の意識と行動の変化を分析するため。

(2)進路選択にプログラムが与えた影響とその要因を検証するため。

②調査対象：「米国NPOインターンシッププログラム」修了生 合計238名

③調査方法：郵送調査・Web調査

④調査期間：郵送調査・Web調査 2015年9月1日～9月30日（30日間）

⑤回収率：47.2% $(103 \div (238-20) \times 100)$

発送数 220+18=238 不達数 20 回答数 103

⑥調査項目：(1)属性 (2)参加動機 (3)帰国後の意識変化 (4)帰国後の行動変化

(5)プログラム評価 (6)進路選択に与えた影響

3. アンケート調査結果及び分析

3.1 サンプルの属性

- 性別：女性 101名（98.1%） 男性 2名（1.9%）

- 年齢別区分

20-24歳：35名（34.3%）

25-29歳：18名（17.6%）

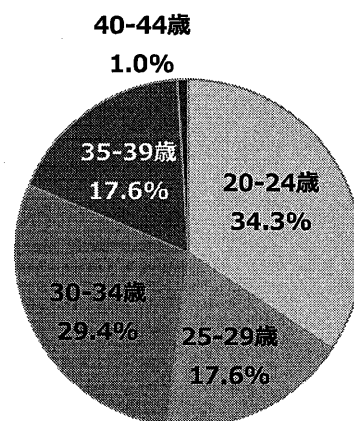
30-34歳：30名（29.4%）

35-39歳：18名（17.6%）

40-44歳：1名（1.0%）

年齢無記載：1名

構成比率



- 卒業学部：福祉貢献 1名 現代社会 10名 ビジネス 3名 交流文化 25名
コミュニケーション 15名(言語 14, 心理 1) 文化創造 24名 (多元文化 23, 表現文化 1)
文学 24名 (教育:7, 英文 14, 国文 1, コミュニケーション 2) 未回答 1名
- 参加当時の学年：1年生 9名, 2年生 56名, 3年生 30名, 4年生 5名, 大学院生 2名
- 参加前のボランティア活動への興味・関心：
興味・関心あり 77名(75%) どちらでもない 20名(19%) 興味なし 6名(6%)

3.2 参加動機について

参加動機としては、「D 異文化体験をするため（ホームステイへの関心も含む）」「A 英語力の向上を図るため」「B 英語を使って働く経験をするため」といった、英語能力向上や異文化体験を目的とした動機が高い。(図 1) 本プログラムは、語学研修とは異なるため、応募条件の中に、ボランティア活動やNPO 団体への興味関心があることを含んでいるが、参加者の真意は、「F 米国のボランティアやNPO 運営のノウハウについて学ぶ」といった学習内容よりも、自らの英語能力向上、海外での異文化体験、今まで学習してきた語学を生かして現地で実践、などの観点で参加を試みている学生が多いことが分かる。また、動機を順位づけしてアンケートに記入してもらったところ、第1位(図 2) から第5位まで、「H 自己変革を起こすため」の項目が常に上位に位置していることから、英語能力向上や異文化体験に限らず、自分自身を模索することや、自分を変えたい、という期待をもって応募をした学生が多いことが分かる。応募動機の特徴的な点としては、本プログラムは「就業体験（インターンシップ）」を行うことを謳っているが、学生が参加するに当たり、卒業後の就職活動や就職を考慮して応募した学生が極めて少ないことだ。(図 1 項目 K)

図1 「米国NPOインターンシッププログラム」の参加動機（複数回答可）

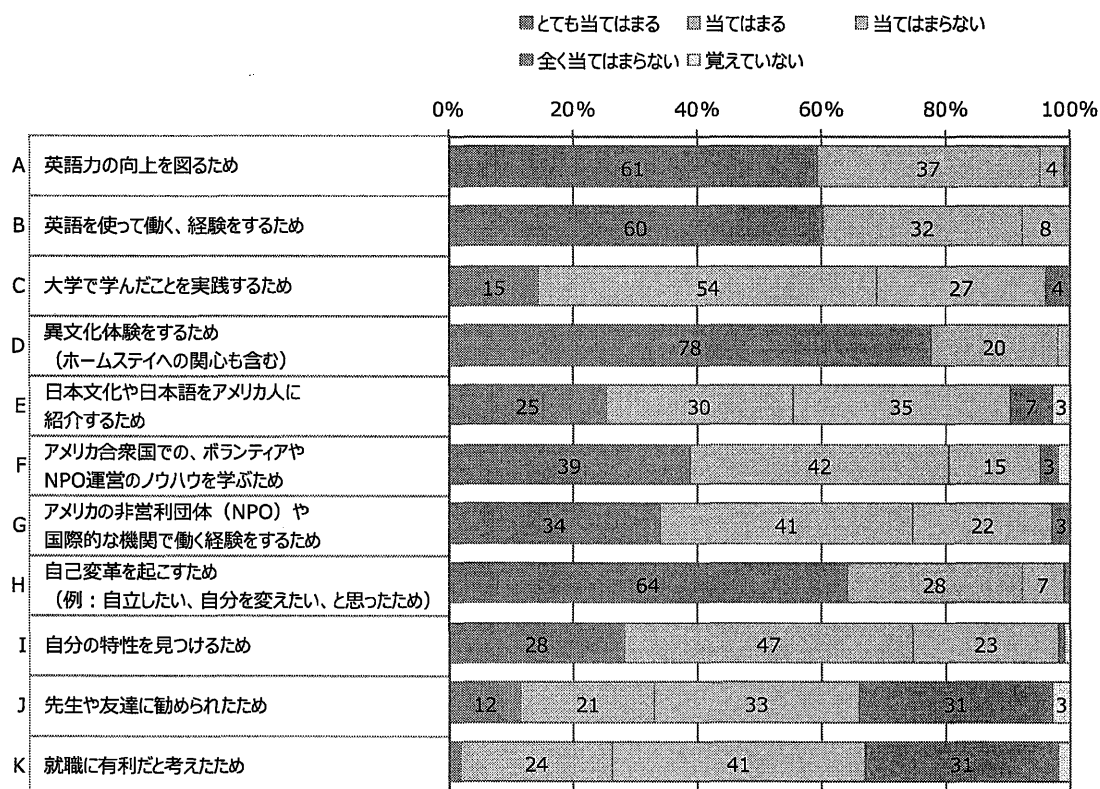
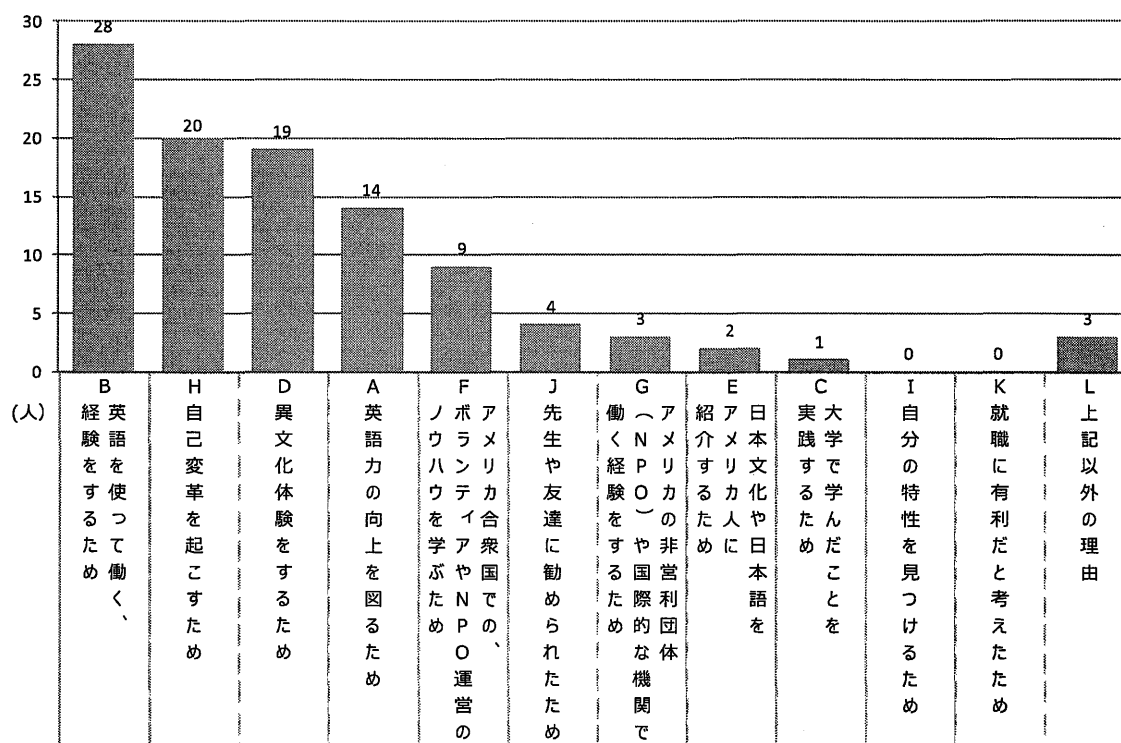


図2「米国NPOインターンシッププログラム」参加動機 第1位



3.3 帰国後の意識変容

帰国後の意識変容について、比較的顕著にみられた結果として、「D 以前より、異なる意見や文化背景を持つ人々のことに関心を持つようになった」(「とても当てはまる」「当てはまる」の合計 95%)、「A 以前より、英語学習に対する学習意欲が向上した」(96%)「C 自国の文化や歴史についてより理解を深めたいと思うようになった」(92%) がある。(図 3) 本プログラムの参加動機と帰国後の意識変化を照らし合わせてみると、参加動機に、英語能力向上や異文化体験などに重点を置いていた学生が、日本人としての自覚を持つようになり、自分自身や日本について語れるものをもつ必要性に気づいたとされる結果がでている。順位付けをした際、第 1 位に「B 英語力とは別の、専門的な知識や技術を身に付けることが大切だと気づいた」にも同じことが言える。(図 4)

また、「とても当てはまる」・「当てはまる」を合計すると、「E 以前よりボランティア活動への関心が増した」(88%)、「H 以前より、非営利団体(NPO)や市民団体に対して、興味や関心をもつようになった。」(89%)「F 以前より自分自身に自信が持てるようになった」(85%)と答えた学生も多いことが分かった。(図 3)

図3「米国NPOインターンシッププログラム」帰国後の意識変容について（複数回答可）

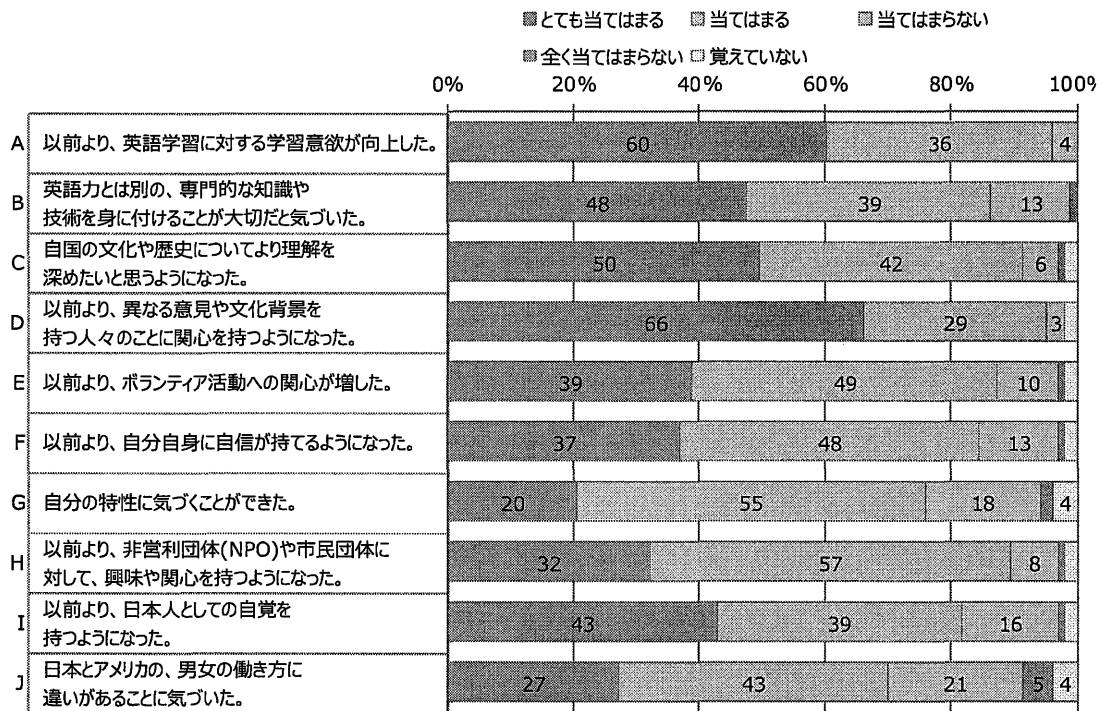
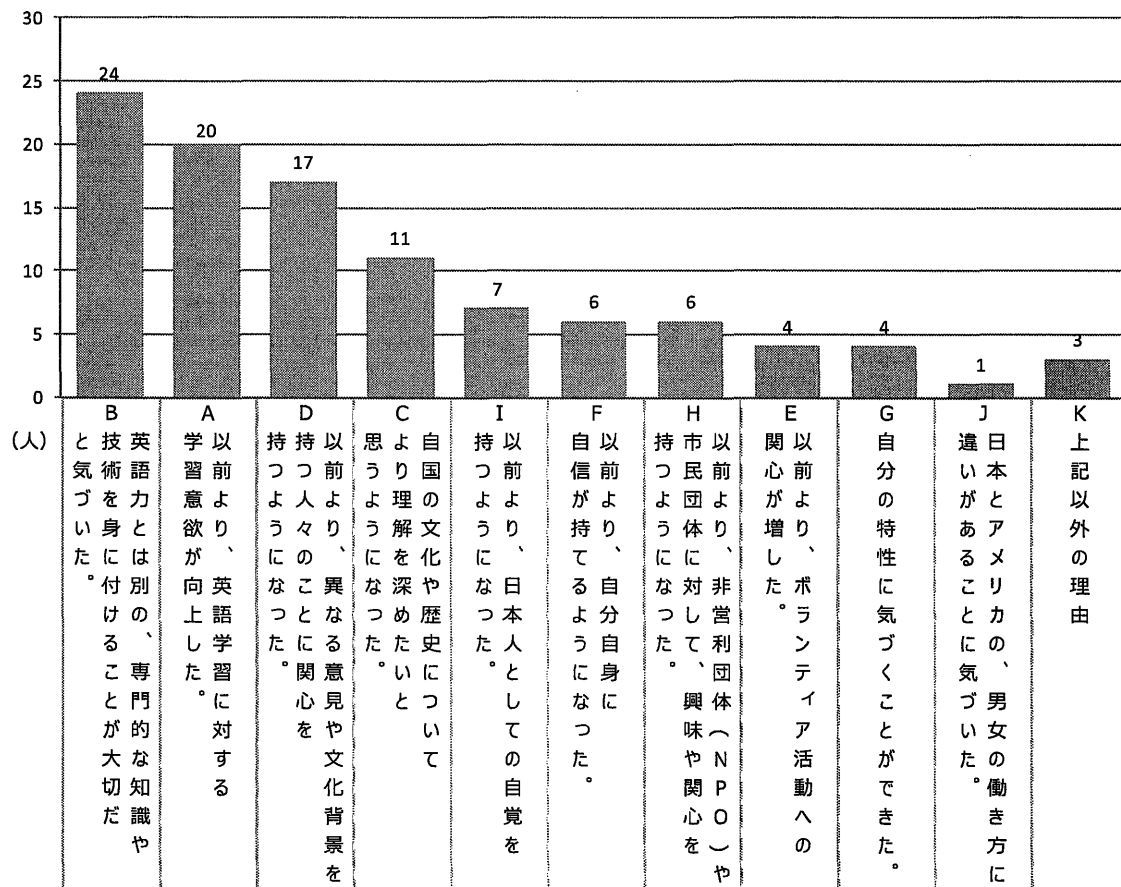


図4「米国NPOインターンシッププログラム」意識変容 第1位



3.4 帰国後の行動変容

行動変容の第1位は「J 旅行や観光以外の目的で、再度異文化体験活動をしたいと思い、海外へ渡った」であった。(図6) 興味深い点として、プログラム修了後、英語圏に限らず、語学留学、ワーキングホリデー、国際ボランティアなど、再度海外へ渡りたいと思い、行動に移した学生が半数近くにのぼったことだ。一方で、同項目で、「当てはまらない」「全く当てはまらない」を選んだ人が52%となり、プログラム参加がきっかけとなり、海外へ行った人とそうでない人が明確に分かれた。行動変容の第2位は「A 以前より、英語の学習に励むようになった」であった。

さらに、注目したいことは、「D 以前より、困っている人がいたら、手を差し伸べるようになった。」の項目が「とても当てはまる」「当てはまる」を合わせると、84%になり、全体的に高い傾向があると言える。(図5) 自由回答欄には、「自分中心に物事を考えることがばかばかしくなった。」「人の為になることで、自分の存在意義を考えるようになった。『ありがとう』と言われることの嬉しさを仕事にできたらいいな、と思った。」「以前より人のために何かをしたいという気持ちが強くなった。」などが記述されていた。

図5「米国NPOインターンシッププログラム」帰国後の行動変容について（複数回答可）

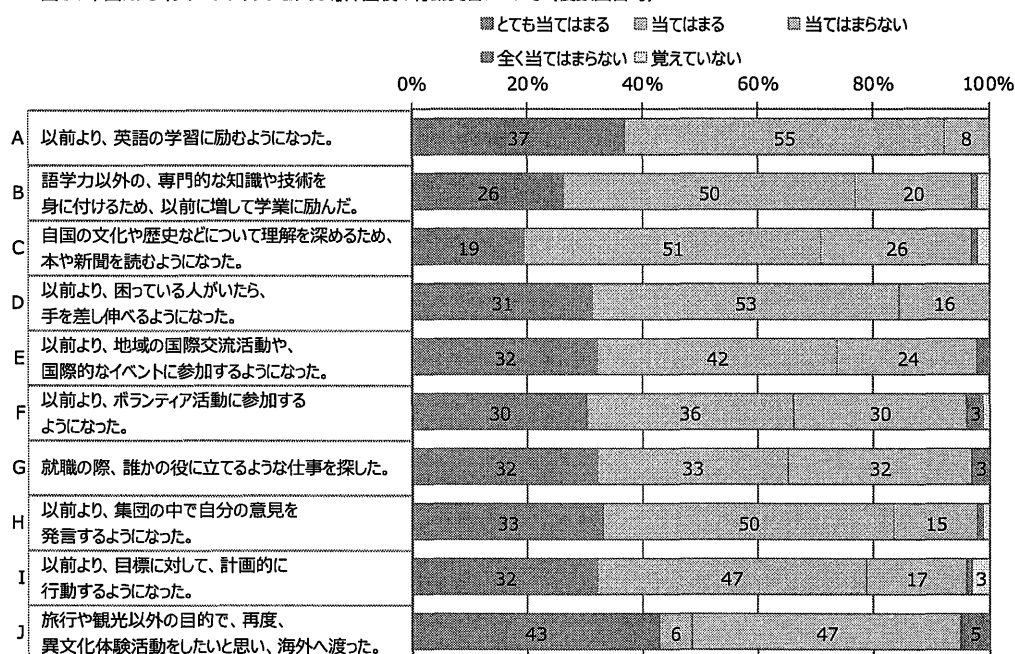
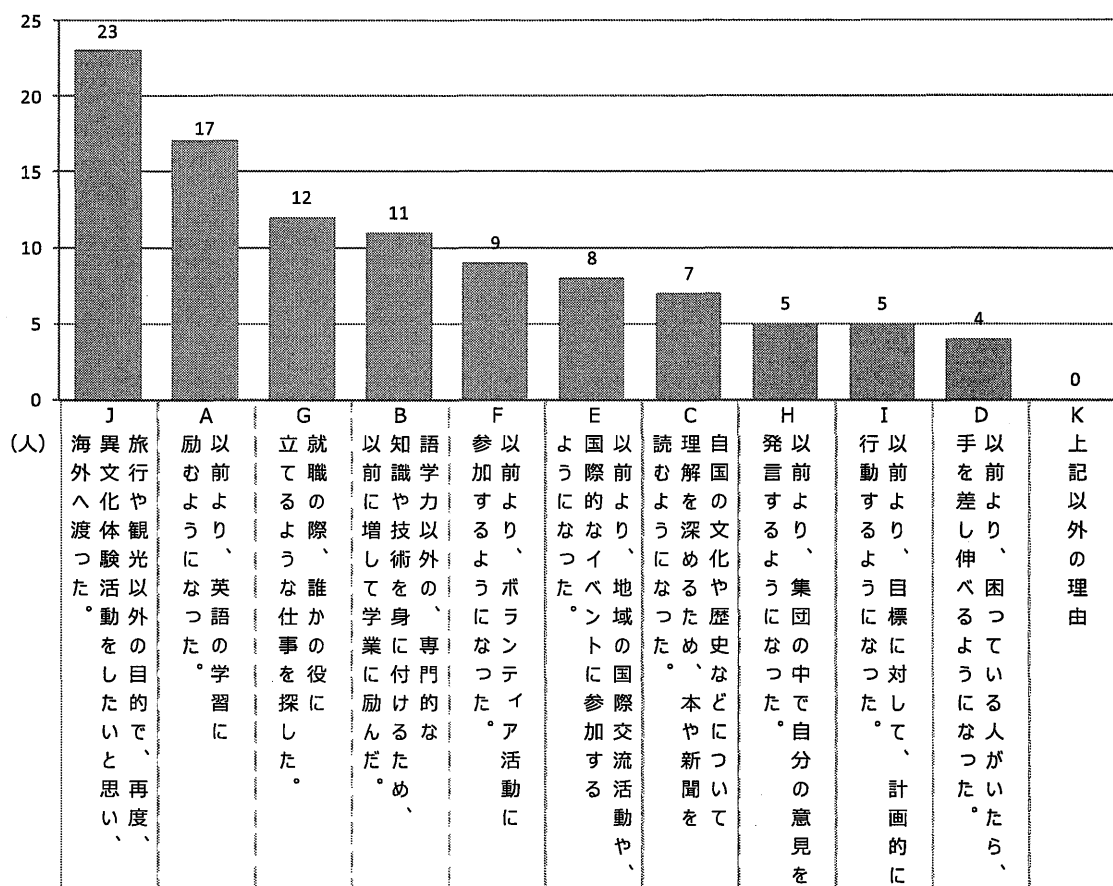


図6「米国NPOインターンシッププログラム」行動変容 第1位

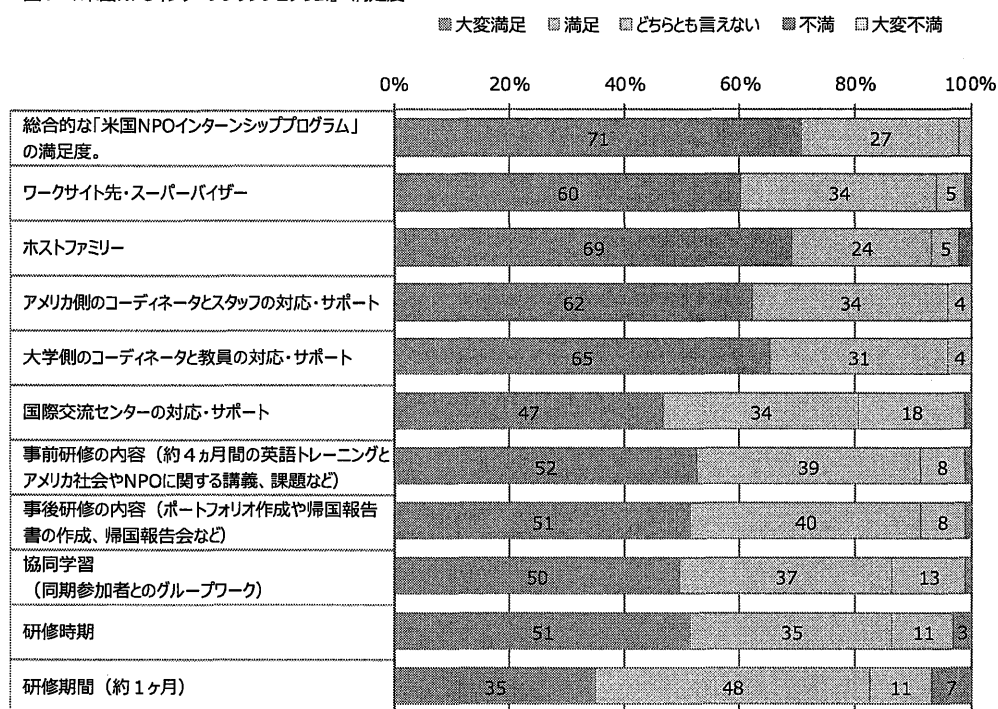


3.5 プログラム評価

総合的なプログラムに対する評価は非常に高い。(図7) 全体的に、どの項目も高い満足度が得られたことから、プログラムは高く評価できると言える。特に、「ワークサイト先・スーパーバイザー」「ホストファミリー」「アメリカ側のコーディネータとスタッフ対応・サポート」「大学側のコーディネータと教員の対応・サポート」に高い満足度が見られる。事前・事後研修、協同学習といった、学習プロセスにも高い評価が得られている。国際交流センターが学生と接する機会は、事務的な連絡事項や書類説明等であるため、全体と比較すると満足度は下回るが、こちらも高い評価が出ていると言える。

約1ヶ月の研修期間について、「不満」「大変不満」と答えた人の理由としては、「慣れた時に帰らないといけない。期間がもっと長ければ、もっと上達、成長でき、もっといろいろなことができたと思った。」「1ヶ月ではなく、3ヶ月、6ヶ月のものに参加をしても、大学の授業や単位に支障がないプログラムがあれば面白いと思う。」など、研修期間が短いことからの不満が全てであった。

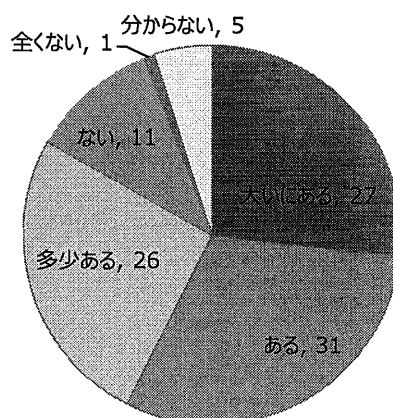
図7 「米国NPOインターンシッププログラム」満足度



3.6 プログラムが進路選択に与えた影響

図8は、本プログラムでの体験が、卒業後の進路選択に与えた影響についての調査結果である。「大いにある」「ある」を合わせると、58%が肯定した。さらに、「多少ある」を加えると、84%の修了者の進路選択に何かしらの影響を与えたことが言える。(図8) 本プログラムだけでなく、他の要素や経験との相乗的な効果があるとも考えられる。「大いにある」「ある」と答えた回答者の記述欄をまとめて書き出してみると、ある特徴がみられた。下記に、就業選択にプログラムの影響が「大いにある」・「ある」と答えた28人の記述欄を抜粋した。

図8 プログラムが進路選択に与えた影響 (%)



質問事項：プログラムに参加をして①自身が得られたもの、②自分自身の変化は何だったか。

(下線筆者)

- (1) 事前学習からアフターフォローまで手厚くサポートしてもらい、良かった。①社会の中で自分は何ができるかと常に問い続ける姿勢 ②青年海外協力隊への参加
- (2) 手厚い研修期間があった。①仲間と協力することの大切さ。自信。②アメリカ合衆国という国の理解が変わった。アメリカで出会ったダンス文化を日本にも広めるため活動をしている。
- (3) ①自己啓発力の向上、コミュニティをもつ大切さや自分自身で経験をし、実行する力を養った。②プログラム参加を契機に、語学留学を決め、自分自身から行動をするようになった。
- (4) ①旅行ではなく、海外の様々な人々と交流する体験の楽しさを知ると共に、自己の生き方を見つめ直すことができた。②日本の子どもたちにも異文化体験を通して自分を変えてもらいたい、と思い就職先を決めた。中学校教員となった今でもその思いは生きている
- (5) ①自分の弱点を知ることができた。②今までの行動をしっかりと続けようと思った。今は起業をして、自分の好きな社会福祉関係の仕事をしている。
- (6) ①自分のことより、相手のことに気がつくようになった。②海外でも自分は働けると自信がついた。
- (7) ①行動することの重要性、仲間との協同学習の良さ ②行動力が増した。
- (8) ①日本国内では感じることをできない日本人であることの誇り、多文化共生社会に適応することの大切さを学んだ。②プログラムを通して出会えた人々と、帰国後も連絡を取り合っ、近況報告をするうちに、もっと英語力を向上させたいと思い、長期留学するきっかけとなった。
- (9) ②精神的な病やハンディキャップのある方々の自立、社会復帰などに関わる経験により、理解を深めるために、卒業後は産業カウンセラーの資格取得へのきっかけとなった。
- (10) ②人生が180度変わった。自己表現をすることの大切さを学び、心が開けた。異文化のある生活がしたいと思い、ワーキングホリデー制度を利用してフランスで一年間生活をした。
- (11) ①本プログラムで学んだことは自分にとって価値あるものだった。英語が十分伝わることが分かったこと、より自分の考えを明確にもつことや自国について学ぶことが大切だと思った。②教育により関心が強くなった。大学卒業後は一般企業へ務めたが、教育への想いが忘れられず、転職し、現在は英語科教員をしている。また、ボランティア活動も継続して行っている。
- (12) ①米国での幼児教育に関する知識、NPO、市民団体の活動についての知識 ②以前よりも他者に対する理解しようとする気持ちが深まった。
- (13) ①行動力とコミュニケーション能力が身に付いた。②「自分の興味のあること、やっていきたいこと」を見つけることができた。これからのキャリアを考えるきっかけになった。
- (14) ①ボランティア事業が企業レベルで行われていることを実際に見て体験し、日本とのボランティアの違いを学ぶことができた。②英語が単なるツールで、日本人として社会や文化を知っていることの方が重要だということを改めて感じた。
- (15) 事前・事後の研修やサポート体制がこのプログラムの重要なポイントだと思う。①②プロ

- グラムで自分が立てた目標に対して、行動を起こすこと。自分の考え、思いを周囲に伝える力。
- (16) ①かけがえのない貴重な体験 ②世界の広さを知ることができた。コミュニケーションをとるために必要な英語の大切さが今後の勉強に対するやる気や姿勢を向上させた。
- (17) ①外の世界を知ることができた。日本以外の国に興味を持てた。②一面的にものをみなくなった。
- (18) ①大きな自信 ②前向きになり、行動力が増した。外国の方以外にも、日本人の方にも積極的にコミュニケーションできるようになった。
- (19) ①自分のやりたいと思ったことに挑戦する勇気と、できないと思ったことにも前向きに取り組み続ける自信を得られた。②デイケアセンターでの体験を通して、言葉だけではなく、相手のことを想う気持ちがあれば、心は通じ合えることを感じ、人のためになる仕事をしたいと強く思うようになった。
- (20) ①②自分の想いや相手に伝えたいと思ったことは、きちんと伝えよう、考えるようになった。意志を伝えるように努めることの大切さを学んだ。
- (21) ①人との出会い、経験、達成感。②市の国際交流協会が推進する多文化共生プロジェクトや企業ボランティアサークルの方々と高齢者支援や地域活性化プログラムなど、長期的なボランティアに参加をするようになった。
- (22) ①プログラムを通して出会った人との繋がり、縁。②自分の考えを発信することの大切さ。広い視野で物事を見ること。スミソニアン園芸部門でインターンを体験し、自分に向いていることが分かり、農業に関わる仕事をしたいと思うようになった。
- (23) ①将来の夢を考える上で、とても参考になる体験をした。②再度、海外へ出て、NPO, NGOに関わりたいたいと思えるようになり、日本語教員になりたいという新たな夢ができた。
- (24) ①初めての異文化体験、英語はコミュニケーションのツールだということ、理想と現実とのギャップ ②海外で自分のできることを探すようになったこと
- (25) ①様々な環境で育った方々と共に働くこと、暮らすことや共に何か企画する際には、相手の伝えたいことをしっかりと聞くことが大切だと学んだ。②自身の意見を伝える勇気がついた。自分から積極的に話しかけるようになった。
- (26) ①積極性と教員としての在り方の違い。②小学校で英語を教えることに対しての抵抗感がなくなった。
- (27) ①自分が見知らぬ土地で何ができ、何が足りないのか、ということが見え、今後何を大切にしたら良いのか、という考え方の変化があった。②日本人としての自覚、文化への興味、英語が目的で終わるのではなく、自分の強みをもって英語を使うことの大切さを知った。
- (28) ①行動力と自信 ②自ら発信することが増えた。

自分自身が得られたものと、変化についての回答に多用されたキーワードとしては「自信」「積極的な行動力」「自分のしたいことが明確に」「他者・多文化への思い」「教員」「自分

の意志や意見を発信する」「コミュニケーション能力」「多面的な視野」「人とのつながり」といった言葉が目立った。また、下線部からは、プログラムに参加したことがきっかけで、自分のキャリアを考えることや、次にとるべき行動への原動力となったことが読み取れる。

4. インタビュー調査

アンケート調査の分析後、7名の卒業生にインタビューを行った。A、C、Gの方は、電話を通して、B、D、E、Fの方には直接面会して、インタビュー調査を行った。プログラムに参加する前の動機、参加後の意識と行動の変化とその要因、進路選択に与えた影響などについて、尋ねた。協力者7名のプロフィールと発言のまとめは表1のようになっている。

表1

番号	参加学年 学科	性別・年代・ 進路への影響度	意識・行動の変化	変化の要因
A	3年 教育	女性/20代前半 大いにある	海外・教育・文化交流への興味 関心の高まり	ワークサイトでの体験（気づき） 帰国後、教員との対話（ふりかえり）
B	2年 英文	女性/20代前半 大いにある	世界へ目を向けるようになった・視野の広がり	ワークサイトでの体験（気づき） アメリカ人の寛大さへの感動
C	3年 多元文化	女性/20代後半 大いにある	海外へ・自分にできることは何か…という問いを常にもつ。	帰国後、教員との対話 自分自身を見つめることができた
D	2年 言コミ ⁷	女性/30代前半 ある	「日本人」としてできること、 誇りや責任を感じる	帰国後、教員との対話 同じ志をもつ仲間存在
E	2年 多元文化	女性/30代前半 多少ある	語学力・知識の不足、専門性の 欠如に気づく	プログラム全体（達成感） 帰国後、教員との対話
F	2年 多元文化	女性/30代前半 ある	意志は明確に伝える 挑戦することに勇気をもつ	プログラム全体（満足感、異文化への好奇心） 教員との対話、仲間からの刺激
G	4年 福祉貢献	男性/20代前半 大いにある	より高い目標を目指す・行動を 起こすこと、向上心をもつ	ワークサイトでの体験（アメリカ人の姿勢） 関わった、出会った全ての人々

協力者Aについては、大学を卒業後大学院へ進み、現在、韓国の大学で日本語や日本文化を教えている。プログラムに参加する前は、教育学科に所属していることもあり、日本で小学校教員になることを志していた。インターンシップ先はチャータースクール（特別認可学校）で、美術教員の指導を受けた。その際、今まで以上にならないほどの楽しさや遣り甲斐を実感した、という。プログラム修了後、その遣り甲斐を求めて、模索した中で見つけ出した答えが、「海外に出て、日本語や日本文化を伝えることがしたい」「日本と海外を繋げる懸け橋のような存在になりたい」であった。

協力者 G については、大学生の頃から福祉関係の分野で起業を考えていた。現在、アルバイトで稼いだ資金をもとに、夢を実現した。愛知県の地元を拠点に、介護を必要とする、障がい者や高齢者を対象にサービスを提供している。アメリカでのインターンシップ先は、ホームレスや生活困窮者のために活動する団体で、毎日様々なボランティアの方と接することで、目的意識が高まったと言う。アメリカ人が自分たちの生活する地域社会に対して、自分自身を高めるためにボランティア活動を行い、その行為が結果的に、地域や誰かのためになっている、彼らの姿勢を見て、もっと自分の経験を生かして次に進みたい、と強く思うようになった。日本をもっと知りたい、福祉分野についてもより関心をもつようになった。

インタビュー協力者 A から F (G はもともと進路が明確であった) に共通する事柄として、帰国後に抱いた悶々とした想いや気づきを、次の行動につなげるために、「対話を通し、指導してくれた教員がいたこと」をそれぞれ挙げている。プログラムを通した経験が、修了生の就業選択に直接的な影響を与えたとは言い難いが、目標を与え、次の行動をとるための、勇気や自信となったことがインタビュー調査から伺える。

5. 考察

本調査・研究の目的は、プログラム成果を検証することであった。そのため、(1) 修了生の意識と行動の変化を分析し、(2) プログラムが進路選択に与えた影響とその要因を検証することを試みてきた。

アンケート調査の結果より、意識変容、行動変容、進路に与えた影響について考察する。

意識の変容では、「B 英語力とは別の、専門的な知識や技術を身につけることが大切だと気づいた」が順位付け 1 位であったことから、参加動機の 1 位「B 英語を使って働く経験をするため」と照合すると、道具としての語学力を如何に使用するのか、大学で学問をする大切さ、教養を身に付ける重要性に気づかせる機会を与えたことが言える。また、記述での回答には、「将来、教育分野の仕事に就きたいと思っているが、その上で、未来を担う児童たちに異文化を尊重することの大切さや、考え方や文化の違いを楽しめる気持ちに気付いてもらえるような教育を施したいという想いが強くなった。また、他国の文化に触れることで、自国の文化の誇れるものに気づけることを学んだ。」といった意見があるように、異文化を受け入れる大切さや日本の良さに気づいた人の意見が多数見られた。一方で、インタビュー協力者 B の発言内容「参加前は日本のことを中心に物事を考えていたが、世界のことにも視点がいくようになった」という意見もある。プログラムに参加したことで、修了生の意識変容の特徴として、自分自身が教養・学問を身に付ける大切さ、他者への思いやり、多角的に物事を見ることなどに意識が変化したことが言える。

さらに、ボランティアや NPO に関して、以前より興味関心をもつ学生が増えたことも意識変容のもう一つの特徴である。基本的に、アンケート回答者の 75% がボランティア活動に興味関心を持っており、プログラム参加前から、70% 以上が実際にボランティア活動を行っていた。

以前に増して、ボランティアに関する理解が深まり、関心を持つようになった要因としては、事前研修から、日米双方からボランティアの意義やNPOについての講義があり、ボランティアに関する用語や話を聞くといった、ボランティア教育がなされたことが影響していると考えられる。学生たちは、アメリカ社会でのボランティア・インターンシップを通して、日本とのスケールの違いを体感し、地域社会におけるボランティアの重要性を体験から学んだのではないだろうか。

意識変容の調査で、「F 自分に自信がもてるようになった」、「G 自分の特性に気づくことができた」の項目に対して、「とても当てはまる」「当てはまる」を合わせると、それぞれ、85%、77% が肯定的に回答した。(図3) また、3.6で、プログラム体験が進路選択に与えた影響が「大いにある」・「ある」と答えた人の記述の内容から読み取ると、自分に対する自信や、プログラムをやり遂げたという達成感が、次の行動を起こすよう「後押し」となった結果が出ている。それを証明するものとして、行動変容の調査では、約50%の修了生が、「J 旅行や観光以外の目的で再度、異文化体験をしたいと思い、海外へ渡った」と、行動を起こしている。(図5)

意識変容と比較すると、全体的に行動変容に占める「とても当てはまる」の回答数は減少するが、頭で理解しても行動にうつすことの難しさがここに現れているのだろう。しかし、属性調査の中で、ボランティア活動への興味で「どちらでもない」「興味なし」と答えた全体の25%(26名)の修了生が、「以前より、ボランティアに参加するようになった」「以前より、地域の国際交流活動や国際的なイベントに参加するようになった」「就職の際、誰かの役に立てるような仕事を探した」という項目に、先の25%のうちの60%が「当てはまる」を選んだという結果も興味深い。木村(2014)によると、「利他的な活動をすることで、所属する組織において認められることになり、その結果として自分の役割や居場所を持つことができる。」とある。今まで自分のことにしか興味がない、と考えていた者が、誰かのために活動をし、必要とされることで、自分の存在価値に気づき、住んでいる地域や社会をよりよくしたいとまで考えることができるようになる。このことは、将来的に社会や地域に貢献できる若者の育成にも繋がると言える。

本プログラムの目的は、参加型学習・体験学習を通して、(1) 公共機関、NPO、ボランティア団体を主とした、アメリカの市民社会について学習する、(2) グループでの振り返りと共有を行いながら、就業体験やホームステイを通して、アメリカ社会を体験する。(3) アメリカでの就業体験とホームステイを通して、英語能力を高める機会を得る、である。

インタビュー調査から、サービス・ラーニングの特徴である、学習プロセスが確立していたこと、また学生たちをプログラム修了前後、指導した「人」の存在が大きいことが明らかになった。これらの目的に向かい、日米双方のプログラム担当者(教員やコーディネータ)、学生が共に、事前・事後研修を含めて長期間、関わっていく。このような一貫性のある目標設定と連携のとれたチームワークが、学生の学びや成長に大きく影響をしているのではないだろうか。また、本プログラムは、サービス・ラーニングの学習プロセスを基調とすることから、単なる

ボランティア活動で終わらせることなく、「振り返り」、「学びの共有」、「評価」を通して、学生たちは、より学びを深化させることに繋がったと考える。

以上のことから、20年間継続した「米国 NPO インターンシッププログラム」の成果は大いにあげられた、と結論づける。

6. 総括

考察から、事前・事後研修の内容と質でプログラムの成果が決まることが明確になった。特に、帰国後、常に学生たちが指導や助言を受けられるよう、フォローアップの体制が大切であることも分かった。大学において、本プログラムが持続可能的に発展するためには、3つのことが必要条件とされる。

1 つは、「人」と「仕組み」の存在である。日米双方のコーディネータ、教員の連携がとれていることは当然、プログラムを支える国際交流センターの職員、CSCG スタッフ、米国側の受入れ団体、ホストファミリーたちが、一丸となり協力できる組織体制と信頼できる人の存在は絶対である。

2 つめは、サービス・ラーニングという、「学習システムの確立」である。海外でのボランティア・インターンシップを通して、意識変容から行動変容へ繋げることができた背景には、学びや気づきを自分自身に落とし込む、または次の目標へ導く一連の学習プロセスがあったことが影響している。唐木(2010)によると、「長期間の学びを可能にするために必要不可欠なのが、『リフレクション(reflection)』という学習活動である」。教育的な観点から、体験から気づき、学び、行動に変換する、「学習システムの確立」が必要である。

3 つめは、「日米双方に与える成果」である。本プログラムは、日米二国間で成り立ち、日本側だけで行えるものではない。交流する相手がいるからこそプログラムが成立するため、アメリカ側にも成果がない限り、持続はしないだろう。アメリカ社会に日本人学生が社会参加をすることで、どのような効果があるのか。それを今後、検証していきたい。

最後に、日本の未来であり希望である若者が、自己の存在意義を早い段階から認識し、目標と自信をもち行動できることが、これからの社会に必要なことであると考え。異文化体験活動とボランティア・インターンシップが一体となった国際サービス・ラーニングプログラムが、今後、多くの高等教育機関で推進されることを期待したい。

謝辞

本プログラム創設者であり、長年温かくご指導してくださいました、榎田勝利教授に深く感謝申し上げます。また、アンケート調査、インタビュー調査にご協力をいただいた皆様、国際交流センターのスタッフの皆様、寛大なご協力をいただき、本当に有難うございました。

参考文献

- 榎田勝利 編著 (2015) 『夢をチカラに 想いをカタチに』 ピラールプレス
- 木村佐枝子 著 (2014) 『大学と社会貢献 ―学生ボランティア活動の教育的意義』 創元社
- 唐木清志 著 (2010) 『アメリカ公教育におけるサービス・ラーニング』 東信堂
- Kenn Allen 著・榎田勝利監修 (1998) 『自己発見の時代 ボランティアが変える世界 ―人的ネットワークを通じて地域社会を構築する』 アルク
- 榎田勝利 編著 (1997) 『ボランティアの鍵貸します ―私たちを変えたアメリカでの体験―』 KTC 中央出版

注

- ¹ National Center for Voluntary Action, Points of Light Foundation, IAVE (ボランティア活動推進国際協議会)などボランティア活動に関わる財団や機関等で、会長や上級執行役員を務めた経歴がある。
- ² 1967年にアメリカで初めて使われた用語。地域貢献活動における教育プログラムであり、振り返りを通じて、自己の成長と学びを獲得する過程である。(木村, p. 71)
- ³ 1996年度から2001年度までの5年間は夏季休暇期間に、それ以降の2002年度からは、毎年2月上旬から春季休暇期間に行われている。

4 受入団体数(種類別)

「米国NPOインターンシップ」受入先団体 職種別 参加人数と割合 (1996-2014年度)			
職種	団体数	参加人数	割合(%)
小学校	17	82	29
社会福祉施設	8	28	10
乳幼児保育施設	10	40	14
高齢者福祉施設	9	37	13
ホームレス	5	11	4
スミソニアン博物館／美術館／動物園／植物園	9	16	6
青少年育成活動	6	11	4
赤十字	1	1	0
文化芸術推進・青少年育成活動団体	4	10	4
ボランティアセンター	6	8	3
コミュニティサービスセンター	4	6	2
国際NGO(アフリカ開発)(途上国)	2	9	3
高等学校	3	7	2
女性のホームレス支援団体	2	2	1
広報・メディア関係の団体	1	1	0
資源・環境に関わる団体	1	2	1
自然動物保護団体	1	1	0
児童教育団体	1	2	1
児童福祉団体	1	2	1
保健衛生施設	3	4	1
図書館	1	1	0
多言語多文化教育	1	1	0
不動産開発・地域開発	1	1	0
文化芸術推進交流活動	1	1	0
合計	98	284	100

(筆者作成)

- ⁵ 渡航費(空港施設使用料、航空保険料、燃油付加運賃を含む)、研修費用、ホームステイ費用
- ⁶ 学習活動や体験の中で作成した作品や記録、自己評価・相互評価の記録、指導・支援者による評価の記録などを時系列に集積したもの
- ⁷ 言語コミュニケーション学科